服飾文化共同研究報告 2010
共同研究番号20010

演劇論および身体論的視座からの近代初期英国における服飾文化に関する研究

The Research on Fashion and Clothing Culture in Early Modern England from the Viewpoint of Theories of Drama and Somatic System

滝川　睦[*1+], 内藤　亮一[*2+], 八鳥　吉明[*3+]
Mutsumu Takikawa[*1+], Ryoichi Naito[*2+], and Yoshiaki Hachitori[*3+]

＊1　名古屋大学文学研究科　名古屋市千種区不老町
Graduate School of Letters, Nagoya University,
Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan
＊2　富山大学人間発達科学部
Faculty of Human Development, University of Toyama,
＊3 群馬工業高等専門学校人文科学科
Humanities, Gunma National College of Technology
+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: This research was to examine historical fashion and sartorial culture in early modern England by referring to the theories of drama and somatic system. The research results are as follows: (1) the elucidation of the representation system of fashion in early modern English culture and drama; (2) the unravelling of the genealogy of "gallant" in English Renaissance drama; (3) the analysis of fetishism in Shakespeare's plays. (1) Dramas in 16th and 17th century England, especially Shakespearean plays, were enacted upon the bilateral representation system of "fashioning" in that while those plays depended on the antitheatrical discourses which denounced the transgressive nature of clothing, they also defended the symbolism of clothing which underlined the ideology that clothing should accord to the status of the wearer. (2) In early modern England, the word "gallant" meant both "gorgeous in appearance" and "chivalrously brave" as well as "a man of fashion." The representative dramatists, such as Shakespeare, Ben Jonson, and Thomas Middleton, made use of those multilayered representations of gallants. Gorgeous sartorial dress of a "gallant" was a signifier that changed its meaning, contingent upon the situation, into anything; sometimes it is a mirror of inward virtue, on occasion a vanity, and under certain circumstances a trigger to make a gap between outward and inward recognizable. (3) The investigation of the fetishes in Shakespeare's plays, for example, the handkerchief in *Othello* (1603-04) and the transvestism in *Twelfth Night* (1601) reveals the interrelationship between clothing, female body, and gender/sexuality in early modern English culture and society.

＊1）mutsumut@lit.nagoya-u.ac.jp

要旨：研究成果は、（1）近代初期英国における服飾の表象システムの解明、（2）服飾文化と結びついた「ギャラント」（gallant）の系譜の解明、（3）Shakespeare 劇におけるフェティシズムの分析である。（1）近代初期英国において、人間形成をも意味する「ファッション」（“fashion”）は、「奢侈禁止法」によって具体化される、服飾の力で人の身分、職業、アイデンティティを規制しようとする社会的動きと、異性装に具現されるような、服飾によって社会的・文化的規範から逸脱しようとする動きと連動する。Shakespeare 劇は、この両極的な動きを反映するだけでなく、後者の動きを弾劾する、当時の演劇反対論者たちの言説に寄り添いながら、その言説を解体する戦略をとっていることを明らかにした。（2）近代初期英国において「ギャラント」（“gallant”）は「流行や快楽を追う男、洗練された紳士」、「外見が豪華で華やかな」さらには「騎士のように勇敢な、高潔な勇気に満ちた」の意味を担う多義的な語であった。Shakespeare を初め、Ben Jonson、Thomas Middleton などの当時の劇作家たちの演劇ダイナミックスは、服飾文化の中心に位置する「ギャラント」の多義性を基軸に生成されることを、データベースに基づき解明した。（3）Shakespeare 劇における服飾に焦点化されるフェティシズムを分析した。*Othello* (1603-04)では、フェティッシュである服飾/ハンカチが女性の身体や女性性を形成し、*Twelfth Night* (1601)では、服飾/男装が性的差異の固定化を遅延させ、身体と性の流動的関係を生成する喜劇的焦点（フェティッシュ）として機能していることを解明した。

配当決定額

平成 20 年度	540.000 円
平成 21 年度	1,320,000 円
平成 22 年度	950,000 円
合計	2,810,000 円

研究の目的

本研究の目的は、16-17 世紀英国における服飾文化の様態と、その文化を生成した近代初期英国社会のダイナミックスを、演劇論的視座および身体論的視座から歴史的に解明することである。

研究の方法

（1）近代初期英国の服飾文化を復元する可能性をもった言説を、16-17 世紀の公衆劇場用の演劇テクストや宮廷仮面劇テクストから抽出・分析し、その結果をデータベース化する。

（2）16-17 世紀英国社会の安定化およびその流動性を表象する記号としての服飾の役割について、当時の社会の様態/動態を記した一次資料をもとに分析を行う。

（3）近代初期英国における身体概念と服飾文化の関連性について、当時の医学、生理学、そして演劇のテクストを分析することによって明らかにする。

（4）（1）－（3）を総合的に検討し、近代初期英国における服飾文化の実相を解明する。

研究の実施計画

[20 年度]

（1）服飾文化と関連した近代初期演劇テクストを分析し、その結果をデータベース化し、当時の舞台上

で表象された服飾文化を再構築する。

（2）R. A. Foakes 編 *Henslowe's Diary* (1961, 2002)や Records of Early English Drama に所収された近代初期英国における劇の上演記録を精査し、具体的な劇の上演と連結した服飾文化の様態を研究する。

（3）近代初期英国における演劇反対論者たちが攻撃の的とする舞台上の服飾の様態を分析し、舞台が映し出していた服飾文化の諸相を解明する。

（4）（1）－（3）の分析を総合し、データベース化された資料をもとに、近代初期英国演劇を構成する服飾文化の全体像を抽出し、服飾が、舞台の内と外で表象される社会の安定性・流動性を表す指標の役割を果たしていたことを解明する。

[21 年度]

（1）近代初期英国の服飾文化と密接に結びついた演劇テクストを精査・分析・データベース化し、16-17 世紀英国演劇において表象された服飾文化を記号論的分析をもとにして再構築する。

（2）近代初期英国の演劇上演と結びついた物質的な服飾文化の様態を研究する。

（3）服飾文化と社会的変動との連関を説明する当時の一次資料を解析し、（1）と（2）および前年度の結果と比較・検討する。

（4）演劇反対論者たちが上梓した出版物（一次資料）を渉猟・解析し、服飾による身体・ジェンダー・セクシュアリティ形成の様態と過程を解明する。

（5）（1）－（4）の分析結果を総合して、データベース化された資料をもとに、近代初期英国演劇を構成する服飾文化の諸相を、身体概念、ジェンダー、セクシュアリティに焦点を合わせて分析する。

[22 年度]

（1）近代初期英国の服飾文化と密接に結びついた演劇テクストを精査・分析・データベース化し、16-17 世紀英国演劇において表象された服飾文化を記号論的分析をもとにして再構築する。

（2）近代初期の演劇上演と結びついた物質的な服飾文化の様態を研究する。

（3）演劇反対論者たちの出版物、服飾・身だしなみの規範書（Advice Book）、奢侈禁止法（sumptuary laws）を解析し、服飾による身体、ジェンダー、セクシュアリティ、マスキュリニティの形成の過程と、異性装によるアイデンティティ生成の過程を解析する。

（4）近代初期英国の服飾文化と社会的変動との連関を、とくにギャラント（gallant）の表象の系譜に焦点を合わせることによって、明らかにする。

（5）近代初期英国における身体論・生理学・解剖学と服飾文化との関連性を解明する。

（6）前年度までの研究成果と（1）から（5）までの分析結果を総合して、データ化した資料をもとに、近代初期英国演劇において表象された服飾文化の諸相を、身体、ジェンダー、セクシュアリティ、アイデンティティなどの鍵概念に焦点を合わせて解明する。

研究の成果

[20 年度]

近代初期英国における「ファッション」（fashion）という言葉の重層的意味と、当時の英国社会における服飾文化との関連性を解明した。“Fashion”は近代初期においては服飾などの流行の型を意味すると同時に、人の「姿や形」、「性質」、「行動」、そして「人間を形成すること」をも意味した。つまり近代初期英国

においては、服飾はすなわち身体であり、個のアイデンティティそのものなのである。当時の社会においてはこの概念は二つの動きとなって表れる。16 世紀に幾度も発布された「奢侈禁止法」のような形で、奢侈な服飾を取り締まることで、身体やアイデンティティを社会・文化の規範内に抑え込もうとする動きと、当時、流行した異性装に表されているように、異性の服飾を身に纏うことによって、個をジェンダーと社会の規範から逸脱させようとする動きである。この二つの動きは公衆劇場で演じられる演劇においては、より鮮明な形をとって表れる。登場人物の身分や社会秩序を厳格に表す服飾と、それらの規矩からの逸脱を表象する服飾が舞台を飾っていたのである。当時の演劇を代表する、Shakespeare 劇の特徴は、両者の服飾概念によって、「着心地の良さ・悪さ」「居心地の良さ・悪さ」、さらには登場人物のアイデンティティの形成・解体、社会の安定性・不安定性を表象していることである。

当時の社会における服装による自己形成の諸相を解明するために，当時の演劇やパンフレットに頻出する“gallant”の表象を研究した。Thomas Dekker の *The Gull's Horn-Book* (1609 年) [1] などに描かれている“gallant”は「華美な服装をする人物像」であり，軽佻浮薄なものとして批判的に描かれている。一方 Shakespeare では「騎士のような勇敢さ」を指す場合が多々ある。*OED* によれば“gallant”は「流行や快楽を追う男，洗練された紳士」（“a man of fashion and pleasure, a fine gentleman”）や「外見が豪華で華やかな」（“gorgeous or showy in appearance”）という意味であるとともに，「騎士のように勇敢な，高潔な勇気に満ちた」（“chivalrously brave, full of noble daring”） の意味である。もともと「華美な服装をした男」を意味する“gallant”が演劇等で様々なタイプに表象されたことは，「華美な服装」の意味することが当時多様であったことを示す。Shakespeare が用いた「騎士のように勇敢な」という意味との関連を研究することで，近代初期英国の服飾文化における「華美な服装」の意味が明らかになると考えられる。

初期近代英国における服飾と身体の関係という問題に対する考察を試みるため、Shakespeare の劇 *Othello* (1603-04) [2] に見られる「ハンカチ」“handkerchief”表象の読解と分析を行った。*Othello* では、ハンカチが悲劇の重要な要素を構成しているが、服飾論ならびに身体論の視座から見ると、この劇では、ハンカチを身体、特に女性身体との関係性において提示し、問題化する視点が顕著であり、それが悲劇の展開と密接に関連している。

初期近代の「文明化の過程」(Norbert Elias) [3] の中、ハンカチは、「清潔さ」と「身体」に関する新たな概念形成を促し、女性の身体は、処女性を含意する「囲われた庭」“*hortus conclusus*”と、逸脱性・猥雑性を特徴とする「漏れやすい器」“leaky vessel”という、相反する表象によって両義的に意義付けがなされた。Othello から Desdemona に贈られるハンカチは、妻の純潔を保証するものだが、そのハンカチは、Iago により盗まれてしまう。さらに、Iago の謀略により、妻の不貞に対する猜疑心に捉えられた Othello にとって、ハンカチは、Desdemona の「グロテスクな身体」(Mikhail Bakhtin) [4] を隠蔽すると同時に可視化するテクスチャー/テクスタイル/テクストとなり、ハンカチを失った Desdemona の身体は、「漏れやすい器」と見なされ、Desdemona は娼婦化されてしまう。

このように、*Othello* においてハンカチは、家父長制の言説や表象に基づく女性の身体観を投影し、実体化するテクスチャー/テクスタイル/テクストとして、悲劇の展開に重要なかたちで関与している。しかし、Desdemona のハンカチには、それと平行し、拮抗する意味の次元も存在する。それは女性登場人物達によって開示される。まずハンカチは、Desdemona が自身の主体性を構築する媒介となっている。また、Iago の妻 Emilia は、女性の身体や欲望と服飾を安易に接合することを拒否する。その結果、服飾と身体は、家父長制の中で、まさにその服飾と身体を核にして構築される女性性の言説と表象に、断層線を

入れる契機ともなり得る。*Othello* は、そうした可能性や契機も胚胎しているのである。

[21 年度]

近代初期英国演劇における服飾文化表象と、着衣と脱衣の詩学との関連性を解明した。Shakespeare 喜劇の革新性は、先行演劇の伝統や慣習を換骨奪胎した点に存する。その革新性の証左とも言うべきものが、服飾文化の表象である。中世以来の、道徳劇や聖史劇の「服飾のシンボリズム」の要諦が、「王冠、深紅・紫色のローブ、十字架付き宝珠、王笏によって王を、白装束によって聖母を、亜麻色の髪と翼によって天使を、剣によって正義を、一冊の本によって真実を、すべてを適切な色を添えて表現すること」[5] であるならば、Shakespeare はそれを着衣と脱衣の詩学がはらむダイナミックスによって見事に破砕する。*The Taming of the Shrew* (1592, *Shr.* と略す) [6] の四幕三場において、新妻 Katherina の手元から最新流行の帽子もガウンも、夫 Petruchio によって奪取される。しかも従順な妻に変身したことを示す大団円（五幕二場）においては、夫の命に従い、Katherina は手ずから帽子を脱ぎ、それを足で踏みつける。道徳劇などの「服飾のシンボリズム」と比較すると、これらの場における、Katherina 絡みの脱衣の身振りの斬新さは明らかである。家父長制度に参入する新婦に与えられるべき服飾が、新郎そして新婦自らによって剥奪・拒絶されるのであるから。登場人物の社会的ステイタスを服飾によって表わすという道徳劇のコンヴェンションも、同時に *Shr.* においては破綻していると言えよう。 また、*Shr.*においては、上記のシンボリズムの破壊が、結婚式に臨む Petruchio の道化さながらの衣装、サブプロットにおける主人 Lucentio と召使い Tranio の衣装交換によって加速されている。

The Two Gentlemen of Verona (1590-91, *TGV* と略す) [7] は着衣の詩学に依拠することで、上述の「服飾のシンボリズム」に亀裂を生じさせる。本劇における着衣の詩学は、大団円を迎えても男装を解こうとしない Julia によって実践される。家父長制度参入を意味すると同時に、混乱した劇のプロットを収束させるはずの女性の服装を、Julia は最終幕においても纏うことはないのである。*TGV* においては、着衣の詩学が最終幕まで堅持されることが非常に重要である。なぜならば、変身を自家薬籠中の物とする海神と同じ名をもつ Proteus に、心変わり＝変身を劇中で実践させることで、変身を忌み嫌う当時の演劇反対論者たちの怒りを増幅させながら、返す刀で Shakespeare は Julia の変装＝変身を媒介にしながら、演劇擁護を行っているからである。

“Gallant”の意味を解明するために， Shakespeare および他の同時代作家、Ben Jonson と Thomas Middleton における“gallant”の用法を電子テクスト [8] から抽出して調査し、“gallant”と称される人物の特徴や年代、作家、ジャンルなどによる違いをまとめた。Shakespeare の用例は 74 例。形容詞の用例が名詞の 2 倍近くあることが他の作家に比べて特徴的である。形容詞は「騎士のように勇敢な」という意味で，名詞は「伊達男、血気盛んな若者、身分の良い人」の意味で用いられている。年代別にみると 1596 年から 1600 年頃までの中期に用例が多い。Jonson の用例は 19 作品で 190 例。Shakespeare の 5 倍の比率に当たる。名詞の用例が 9 割で「遊び人」の意味で用いてある。年代別には、Shakespeare とほぼ重なるように、1598 年から 1601 年までの 4 作品に半分以上が集中している。Middleton の用例は 20 作品で 190 例。名詞がほとんどである。調査した作品は 1600 年から 1622 年までのものである。結果、Shakespeare と他の作家の用法に違いがあることが明らかになった。Shakespeare は「勇敢な」と「放蕩者」の両方の意味で用いていたのに対して、Jonson、Middleton は「放蕩者」の意味で批判の対象として用いている。また“gallant”の意味する人物像の特徴がいくつか明らかにできた。Shakespeare の“gallant”の多くは、血気盛んな若者、 あるいは華美ではなくみすぼらしい格好でも、若くて威勢がよければ“gallant”と呼ばれてい

る。一方、珍妙な服装をして虚勢を張った人物や、金持ちで着飾っているが「カモ」にされる人物は“gallant”と呼ばれない。これらの人物が Jonson や Middleton ならば“gallant”となる。Jonson と Middleton の場合、“gallant”の特徴は派手な衣装である。彼らは衣装だけで中身が変わると思っているが、実際は、衣装を変えたけれど精神的には何も変わらない。概して Shakespeare の“gallant”の特徴が内面重視であるとしたら，Jonson や Middleton は外面重視であることが用法分析から解明された。

Shakespeare の劇作品に見られる「ハンカチ」表象の分析と、“the Rainbow Portrait”と呼ばれるエリザベス一世の肖像画に描かれたマントの考察を通して、*Othello* のハンカチ表象に確認される意味の重層性、特に身体性を検証した。Shakespeare の劇における「ハンカチ」“handkerchief”という語の使用状況を検討すると、Shakespeare は、劇の執筆にあたって、この言葉を必ずしも頻用しているわけではないことが明らかとなる。 ハンカチが Shakespeare 劇で用いられる場合、日常生活で使用されるそれの描写が含まれる一方で、「死」との明確な連想の中で表現されることがある。ハンカチは、Shakespeare の劇作品において、その日常的使用性への一定の関心に基づきながらも、血や死に繋がる不吉さと強い象徴的関係性を保有する場合があることがわかる。*Othello* は、ハンカチのこの不吉な象徴性を土台としながら、それを女性身体と関係づけることで、さらに複雑なかたちで深化させていると考えられる。例えば、*Othello* のハンカチは、目や鼻、耳、唇といった身体部位と、連想的に結び付けられていく。その際、目/鼻/耳/唇は、Othello の性的連想を刺激し、ハンカチは、多くの性的観念や性的イメージが圧縮・置換された表象となり、それらを通して、Desdemona の女性身体は、性的欲望の身体として規定されていく。 “The Rainbow Portrait”に描かれたエリザベス一世のマントに描かれると同時に抑圧され、不可視なものとされる女性身体のグロテスク性は、文脈を変えて、Desdemona に投影されているとも言える。

[22 年度]

近代初期英国における服飾の表象作用と、個人や国のアイデンティティ形成との関連を、当時の演劇反対論者の言説および Shakespeare 演劇と比較・検討することによって明らかにした。William Harrison はその著 *The Description of England* (1587)において、Andrew Boorde の *The First Book of the Introduction of Knowledge* (1547)に添えられた挿絵—頭に帽子を載せ、腰に布を纏った裸体の男が、裁断用ハサミを左手にかざし、右腕に布を垂らした図版—に言及し、英国人は最新の流行だけを追い求める、軽佻浮薄な国民なり、と喝破している [9]。服飾こそ人のアイデンティティを形成するという観念に基づきながら、流行にのみ心を奪われる国民の住む英国にはナショナル・アイデンティティが成立しないことを説いているのである。このような考え方が、きらびやかな衣装と、役者という階層社会の底辺に蠢く存在の狭間に楔をうちこむ、当時の演劇反対論者たちの言説を加速化させていく。Shakespeare は *Much Ado about Nothing* (1598) を制作するにあたり、服飾は人と共同体のアイデンティティ形成の核であると同時に、それを解体するモメントでもある、という脱構築的発想を逆手にとる。その劇のプロットを、服飾および外見に依拠することの危険性を絶えず警告した演劇反対論者の言説に寄りかからせつつも、同時に劇中で服飾に備わるアイデンティティ成形力をフルに活用してみせるのであるから。

“Gallant”と服装による自己形成の問題を個々の演劇作品の具体的な分析と当時の服装観を絡めて解明することを行った。その結果として，まず近代初期英国における“gallant”の表象するものが騎士のイメージから放蕩者のイメージに変わったことと，その過程において服装と自己形成のありかたが推移したことを明らかにした。また当時の「市民喜劇」（city comedies）において「服装が人を表す」という規範の恣意性が暴露されていると同時に規範の強化にも繋がる点を明らかにした。“gallant”の表象に関しては

Shakespeare の *Henry IV, Part 1* などに登場する Hal と Hotspur が騎士のイメージでありながら，必ずしも称揚されているわけではなく，Hal は騎士と放蕩者のイメージを兼ね備えており，それは Jonson や J. Cooke [10]の劇に表象される市民喜劇の放蕩者の“gallant”に繋がっていく。とくに服装を自己形成に利用する Hal から，服装だけで自己形成ができると信じる市民喜劇の“gallant”に至る過程に“gallant”の系譜を見ることができる。また当時の人文主義者や宗教家の服装観が当時の演劇にも見ることができることを明らかにした。

Othello に見られる「ハンカチ」表象と、*Twelfth Night* (1601?) ［11］ における「異性装」の読解を通して、女性身体や女性性の問題を分析し、同時に、ジェンダーやセクシュアリティといった概念の生成の状況を検証することで、服飾と身体と性が織りなす関係を考察した。

Othello にとって、ハンカチは、Desdemona のグロテスクな身体と性的欲望を否定し、隠蔽すると同時に、それらを確認し、可視化するテクスチャー/テクスタイル/テクストとなる。男性性を毀損されることに対する「去勢」“castration”不安に捉えられた Othello は、ハンカチに執着することで、自身の男性性/主体性を維持しようとするが、ハンカチへのこの執着が、ハンカチを「フェティッシュ」“fetish”へと変容させる。Othello は、ハンカチへのフェティシズム的執着を通して、Desdemona の存在全体を想像的に規定し、つくり上げていくのである。Desdemona の身体や性的欲望を含め、Othello にとって、Desdemona の女性性とみなされるものは、こうしたプロセスがもたらす想像的産物に他ならない。

また、服飾は、着脱可能な人工物でありながら、身体の一部ともみなされうるという意味で、“prosthesis”「補綴/人工器官」として捉え直すこともできる[12]。そして、服飾は、ジェンダーやセクシュアリティの記号として、それを身に纏うものの身体を、「補綴的/人工器官的身体」“the prosthetic body”、すなわち、性的身体に組織化する[13]。実際、*Othello* におけるハンカチは、「補綴/人工器官」として、Desdemona の身体の延長と認識され、Desdemona の存在を規定していくことになる。

しかし、フェティッシュも「補綴/人工器官」も、その意味は常に不安定さを伴い、矛盾に満ちたものとなる。さらに、Shakespeare の時代、Desdemona を演じたのは「異性装」の少年俳優であったことも、服飾と身体と性を巡る問題をより複雑にしていたことは間違いない。

主な発表論文等

[雑誌論文]

① 滝川 睦 ：「*Coriolanus*における放浪と女性化をめぐる不安」『名古屋大学文学部研究論集』第 55 巻、2009 年 3 月、11-23 頁

② 滝川 睦 ：「近代初期英国における演劇反対論的言説と*The Two Gentlemen of Verona*」『名古屋大学文学部研究論集』第 56 巻、2010 年 3 月、19-31 頁

③ 内藤亮一 ：「Shakespeareにおけるgallantの用法」『富山大学人間発達科学部紀要』第 4 巻、2010 年 3 月、191-202 頁

④ 八鳥吉明 ：「服飾と身体の交錯―*Othello*におけるハンカチ再考」、『IVY』第 42 巻、2010 年 3 月、1-22 頁

⑤ 内藤亮一 ：「近代初期英国におけるギャラントの系譜学―騎士から放蕩者へ―」『IVY』第 43 巻、2010 年 11 月、1-22 頁

⑥ 滝川 睦 ：「国王のスペクタクルとマスターレス・マン―*Macbeth*における宴の場再考―」『名古屋大

学文学部研究論集』第 57 巻、2011 年 3 月、1-14 頁

⑦ 八鳥吉明 ：「ファッションとジェンダー—*Othello*、ハンカチ、フェティッシュ」『群馬高専レビュー』第 29 巻、2011 年 3 月、49-54 頁

[報告書]

① 滝川 睦、内藤亮一、八鳥吉明:『服飾文化共同研究報告 2009ー共同研究番号 20010 演劇論および身体論的視座からの近代初期英国における服飾文化に関する研究』文化ファッション研究機構、2010 年 2 月

[学会発表]

① 八鳥吉明 ：「服飾と身体の交錯—*Othello*におけるハンカチ再考」、第 48 回シェイクスピア学会、2009 年 10 月 3 日（於 筑波大学）

② 滝川 睦、内藤亮一、八鳥吉明 ：「綾を読む—近代初期英国文学と服飾文化—」、名古屋大学英文学会第 49 回大会シンポジウム、2010 年 4 月 17 日（於 名古屋大学）

[口頭発表]

① 内藤亮一 ：「近代初期英国の服飾文化—服が人をつくる」放送大学富山学習センター・オープンセミナー、2011 年 1 月 8 日（於 放送大学富山学習センター）

参考文献

1. Thomas Dekker: *The Wonderful Year ; The Gull's Horn-Book ; Penny-Wise, Pound-Foolish ; English Villainies Discovered by Lantern and Candlelight ; and Selected Writings*, The Stratford-upon-Avon Library 4, edited by E. D. Pendry, E. Arnold (1967)
2. William Shakespeare : *Othello*, edited by E. A. J. Honigmann, The Arden Shakespeare. 3rd.ed, Nelson (1997)
3. Norbert Elias : *The Civilizing Process : Sociogenetic and Psychogenetic Investigations*, translated by Edmund Jephcott, edited by Eric Dunning, Johan Goudsblom, and Stephen Mennell, Rev. ed, Blackwell (2000)
4. Mikhail Bakhtin : *Rabelais and His World*, translated by Helene Iswolsky, pp. 26-27, Indiana UP (1984)
5. David M. Bevington : *From* Mankind *to Marlowe : Growth of Structure in the Popular Drama of Tudor England*, p. 93, Harvard UP (1962)
6. William Shakespeare : *The Taming of the Shrew*, edited by Ann Thompson, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge UP (1984)
7. William Shakespeare : *The Two Gentlemen of Verona*, edited by William C. Carroll, The Arden Shakespeare, 3rd Ser., Thomson Learning (2004)
8. *Project Gutenberg : Brose by Author S.* ; *Luminarium: The Works of Ben Jonson* ; Chris Cleary : *The Plays of Thomas Middleton (1580-1627)*
9. William Harrison : *Harrison's Description of England in Shakespeare's Youth*, edited by Frederick J. Furnivall. Pt. 1. BK. 2. The New Shakspere Society (1877)
10. J. Cooke: *Greene's Tu Quoque or, The Cittie Gallant*, edited by Alan J. Berman, The Renaissance Imagination 8, Garland (1984)

11. William Shakespeare : *Twelfth Night, or What You Will*, edited by Keir Elam, The Arden Shakespeare. 3rd. ser, Cengage Learning (2008)
12. Will Fisher : *Materializing Gender in Early Modern English Literature and Culture*, Cambridge Studies in Renaissance Literature and Culture 52, pp. 1-35, Cambridge UP (2006)
13. Ann Rosalind Jones and Peter Stallybrass : *Renaissance Clothing and the Materials of Memory*, Cambridge Studies in Renaissance Literature and Culture, pp. 207-16, Cambridge UP (2000)